

# キューピッド役は パヒュームしたい

筑波大学教授  
サイエンスライター  
渡辺 政隆

2010年7月、東京都文京区小石川の閑静な地区に、大勢の人が詰めかける騒ぎが勃発した。東京大学の附属植物園である小石川植物園で開花した珍しい花を目当てに、特別公開された3日間に2万人あまりの見学者が押し寄せたのだ。その花の名は、インドネシア、スマトラ島原産のショクダイオオコンニャク。最短でも2年に1回しか咲かない「世界最大の花」にして、しかも花の盛りは一晩しかないということで話題が盛り上がったのだ。しかもこの花、強烈なおいがするという。怖いもの見たさ（嗅ぎたさ?）も手伝って、それだけの人が訪れたのだろう。

ただしこの花、実際には「世界最大」ではない。その栄誉は、ラフレシアのものだからだ。スマトラ島とボルネオ島に分布するラフレシアの花の直径は最大90センチといわれている。ちなみにこの名前は、シンガポール建設の立役者トーマス・ラッフルズ（1781-1826）にちなんでいる。ラッフルズ率いる調査隊が1818年に発見し、同行した植物学者ジョゼフ・アーノルド（1782-1818）がその特徴を観察し、ジョゼフ・バンクス（1743-1820）に報告したのだ（アーノルドはその直後に病死した）。学名は、ラッフルズとアーノルドにちなみ、

*Rafflesia arnoldi* と命名されている。ただしこの発見の先取権に関しては、英仏間の戦争のどさくさで英国チームに栄冠が渡ったという経緯がある。この世界最大の花を最初に発見した西洋人は、フランスの探検家ルイ・オグスト・デシャン（1765-1842）なのだ。

デシャンは、今で言うラフレシア属の標本を1797年に採集し、1798年に船に積み込んで帰国の途に就いた。ところが、途中で英国海軍に捕縛され、3年間の探検で集めた標本と資料のすべてを没収されてしまったのだ。キュー植物園のウェブサイトに掲載されている情報によれば、それらの没収品が再発見されたのは、1954年、大英自然史博物館の収蔵庫からだったという。

それはともかく、ラフレシアは寄生植物で、寄主はブドウ科のミツバカズラである。葉や茎はなく、花だけが咲く。雌花と雄花があるが、花粉は粘液状である。その花粉を運ぶキューピッド役を務めるのは、蝶でも蛾でも蜂でもない。なんと、強烈な腐肉臭に引き寄せられて飛来するキンバエやニクバエであるという。

直径90センチのラフレシアの花に対して、ショクダイオ

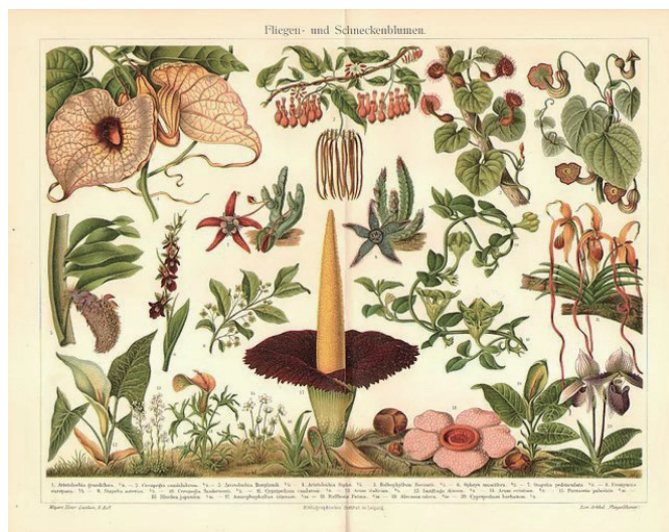


図-1 ドイツの百科事典（1895）に掲載された熱帯の植物に描かれたラフレシア（右下）とショクダイオオコンニャク（中央下）。



図-2 コンニャクの花。ウォルター・フッド・フィッチ画（1875）

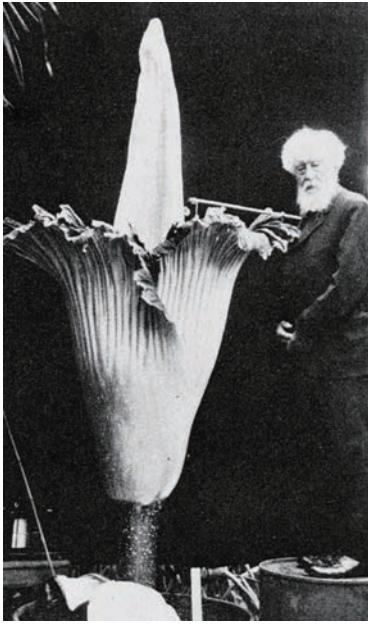


図-3 オランダのヴァーヘンゲン植物園で1932年に開花した花と思われるショクダイオオコンニャクの花。その横に立つのは、突然変異説で有名なフーゴ・ド・フリース (1848-1935)。



図-4 2014年に国立科学博物館筑波実験林で開花したショクダイオオコンニャク。高さは272センチ。4日間の特別公開で14,336人が訪れた。(写真：筑波大学提供)

オコンニャクの花は、上記の小石川植物園の花は小ぶりだったが、今年、2018年6月に国立科学博物館筑波実験植物園で咲いた花は、高さ240センチ、直径106センチに達した。この数字だけを見ればラフレシアを凌駕しているわけだが、問題は「花」の定義にかかわる。ラフレシアは単独の「花」であるのに対し、ショクダイオオコンニャクの「花」は、実際には、棒状の肉(にく)穂(すい)花序(かじょ)とそれを取り巻く苞(ほう)なのだ。

外観から見えているのは、「花」を包む「苞」という部分である。これは葉にあたるものなので、いくら大きくても、「花」とは認定されない。この苞は、サトイモ科では特別に仏炎苞(ぶつえんほう)と呼ばれている。仏像の光背を飾る火焰(かえん)になぞらえた名称だという。ちなみにショクダイオオコンニャクという和名は、燭台に似た大きなコンニャクの仲間という意味である。学名の *Amorphophallus titanum* は、「形の崩れた(amorphos)巨大な(titan)男根(phallos)」というすごい意味である。

高層湿原の夏を飾る清楚なミズバショウの「白い花」も仏炎苞である。ミズバショウもサトイモ科の植物で、白い苞に包まれた黄色い肉穂が花序なのである。同じサトイモ科であるショクダイオオコンニャクの花の基本構造も同じである。ただしショクダイオオコンニャクの場合、花序は外からは見えない。苞の中から突き出ているのは、付属体と呼ばれる器官であり、ここから受粉昆虫を引き寄せる強烈なおいを出す。この場合も腐肉臭である。

ショクダイオオコンニャクは、1878年に、イタリアの植物学者オダルド・ベッカーリ(1843-1920)によって発見さ

れた。彼が持ち帰った種子から発芽した植物の1つは、キュー植物園にも贈られ、1889年に栽培下で初めて開花した。

ショクダイオオコンニャクは、コンニャクと同じように、葉を伸ばして光合成をし、塊茎、いわゆるコンニャク玉を太らす時期と、休眠する時期、そして花芽を出して開花する時期を繰り返す。コンニャク畑で花を見ることはない。3年ほど栽培した後、花が咲く前に収穫するからだ。

雌雄異株のラフレシアとは違い、ショクダイオオコンニャクは雌雄同株ではあるが、雌雄異花である。肉穂花序の基部近くに雌花、その上方に雄花がつく。仏炎苞が開き、花序が伸びると、付属体から腐臭が発せられる。ここで苞が、受粉昆虫を捕らえるトラップの役割を演じることになる。臭いに誘われてやってきた虫を滑り落として雌花のもとにいぎなうのだ。その虫に他の花の花粉がついていれば受粉成功である。しかし、出口はどこにもない。すると遅れて咲いた上方の雄花が開花し、花粉を虫の上に落とす。このタイミングで虫の脱出が可能となる。しおれて破れた苞に脱出口が用意されるからだ。

愛のキューピッド役を務めるのは動物の死骸を好む甲虫シデムシだと言われているが、まだ確証はないようだ。考えてみると、ショクダイオオコンニャクに引き寄せられるシデムシには、いかなる役得もない。完全な偏利共生と言えそうだ。ラフレシアのキューピッド役を務めるキンバエにしてもしかり。まあ、えもいわれぬパヒュームに取り巻かれて恍惚となるだけでも報われているのかもしれないのだが、知る由もない。